④本学のインターンシップ制度を活用した派遣（その1）

本学では、学校現場などである一定期間の指導あるいは実務経験を積ませることを通して、実践的な指導力を学生に身に付けさせることを目的とした授業（インターンシップ）を設けている。学生は、それまでに実技科目および講義科目などで修得した知識・技能を活用しながら指導に携わる。このインターンシップ制度を利用して学生を学校現場に派遣し、部活動の指導に従事させた。この取り組みは、本プロジェクトの制度設計部門において立案した「部活動指導員派遣事業モデル（仮称）」のひな型として実践する。

なお、部活動に大学生を派遣することの成果と課題を検討するため、生徒の体力測定と、インターンシップ終了後に受け入れ機関の顧問、および生徒にインタビュー調査を行った。本節では、学生派遣の概要と先に述べた調査結果をまとめ、部活動に大学生を派遣することの成果と課題について素描する。

（1）派遣先の情報

派遣先：大阪府立D高等学校　スポーツ種目B部　合計32名（男子21名、女子11名）

［内訳］1年生：男子8名、女子3名　2年生：男子5名、女子3名　3年生：男子8名、女子5名

練習時間：火曜日～金曜日（2～3時間）、土曜日～日曜日（6時間以上）、月曜日・休み

顧問：男性（50歳以上）

担当教科：保健体育以外

競技歴・指導歴：スポーツ種目Bの競技歴3年6ヶ月・指導歴17年

資格：スポーツ種目B・日本スポーツ協会公認コーチ

（2）派遣学生の情報

派遣学生：本学学生（男性）

競技歴・指導歴：スポーツ種目Bの競技歴7年10ヶ月・指導歴 3年

（3）派遣実績

期間：2019年7月～12月

活動状況：一週間に2回程度（土曜日と日曜日）、9時～18時まで技術指導

大会は「地方協会主催の選手権大会」「高体連の地方大会」等、3大会を引率。

活動内容：主に1、2年生の技術指導を担当する。顧問はレギュラー（主に3年生）の技術指導を行う。

顧問が不在の際は、原則副顧問立ち合いのもと指導を行う。

試合に帯同し指導（顧問からの依頼があったわけではないが、学生が自主的に帯同する）。

（4）指導方針

実践的能力を高めるよい機会とするため、指導方針を以下のように決め、指導に取り組んだ。

また、指導の成果を検証するため簡単な調査を行った。

（指導方針）実践的指導力を高めるよい機会とするため、学生には以下の指導方針を決めさせ指導にあたらせた。

3つの全国大会（選抜大会・高校総体・国体）出場を目指す。

体力の維持・増進を図る。

どんな生徒にとっても成長の場とする。

（活動内容）1、2年生の技術指導を担当する。顧問はレギュラー（主に3年生）の技術指導を行う。

顧問が不在の時は、原則副顧問立ち合いのもと指導を行う。試合に帯同し生徒を指導する。

（5）調査

1）体力測定（競技専門器具を使用した測定）

測定方法：ローイングエルゴメーターを20分間漕ぎ、漕距離を測定した（1分間に漕ぐ回数の指定なし）。

測定時期：1回目　2019年11月上旬

2回目　2019年12月中旬

対象：16名（大学生が指導した1、2年生の内2回の測定に参加した生徒

2）生徒へのインタビュー

質問項目：①大学生が指導に来てくれると聞いてどのように思いましたか。

②実際に大学生から指導を受けてどのように思いましたか。

③大学生の指導を受けてあなたの技能はどのように変わりましたか。

④大学生の指導を受けてあなたの体力はどのように変わりましたか。

⑤大学生の指導を受けてあなたの生活態度はどのように変わりましたか。

⑥顧問の先生と大学生と2人体制の指導についてどのように思いますか。プラス面とマイナス面の両方をお話しください。

3）顧問へのインタビュー

質問項目：①本学の学生をインターンシップ授業として受け入れてくださったのですが、本学学生の指導に関してどのように思われましたか。

②本学の学生を受けいれてくださり、先生の業務にどのような影響がありましたか。

③現在、運動部において部活動指導員を導入する動きがあります。これについてどのようなご意見をお持ちですか。

④外部の指導者がトラブルなく行うためにはどのような工夫が必要だと思われますか。

（6）調査結果

1）体力測定の結果

表1は、ローイングエルゴメーターの測定結果を示している。2回の測定に参加した16名のうち9名の記録が向上した。

■表1　ローイングエルゴメーターの測定結果（m）　　n=16（網掛け女子）

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ
1回目	5161	4981	4702	4911	5001	4806	4867	4275	4492	4947	5425	4761	4744	4896	4754	4473
2回目	5214	5025	4884	4869	4993	4818	4825	4385	4550	4912	5416	4856	4844	4885	4595	4484
判定	○	○	○			○		○	○			○	○			○

※2回目の測定結果が向上した者の判定欄に○をつけた

④本学のインターンシップ制度を活用した派遣（その3）

2）生徒へのインタビュー結果

■表2　生徒へのインタビューの結果

	質　問	カテゴリー		2年（6名）	1年（5名）	合計	例
①	大学生が指導に来てくれると聞いてどのように思いましたか.	肯定的	技能向上への期待	2	4	6	最新の技術を教えてもらえる、知識が豊富。技能が上達する
			人柄への期待	1	0	1	年齢が近い，親しみやすい
		否定的	練習への不安	1	1	2	2人体制で練習が厳しくなる
			人柄への不安	1	0	1	怖い人だったらどうしようと思った
		無		1	0	1	何も思わなかった
②	実際に大学生から指導を受けてどのように思いましたか	肯定的	技能・体力の向上	4	0	4	知識が豊富で上達した。体力がついてきてきつくなくなった
			人柄	2	0	2	話しやすいし、よく教えてくれる
		否定的	指示の仕方	0	2	2	具体的な指示がない。何を言っているのか理解できない時がある
			課題が難しい	0	3	3	要求が高すぎてついていけない。課題が難しい
③	大学生の指導を受けてあなたの技能はどのように変わりましたか		向上した	5	4	9	
			低下した	0	0	0	
			変化なし	1	0	1	
			わからない	0	1	1	
④	大学生の指導を受けてあなたの体力はどのように変わりましたか		向上した	5	5	10	
			低下した	0	0	0	
			変化なし	1	0	1	
			わからない	0	0	0	
⑤	大学生の指導を受けてあなたの生活態度はどのように変わりましたか		向上した	1	0	1	
			低下した	0	0	0	
			変化なし	2	5	7	
			わからない	3	0	3	
⑥	顧問の先生と大学生と2人体制の指導についてどのように思いますか．プラス面とマイナス面の両方をお話しください.	肯定的	技術指導	6	4	10	2つの視点から意見が聞けて技能が向上した
		否定的	技術指導	0	2	2	2人の意見が違うので混乱した
			管理体制	0	1	1	監視が厳しくなり気が抜けない
			指示の仕方	0	0	0	指示が理解できない時がある

大学生が指導に来てくれることに対して、7割の者が技能面での指導に期待をし、3割の者が指導に不安を覚えていた。実際に大学生から指導を受けたことについて、2年生と1年生の受け止め方が異なっていた。大学生の指導を受けて、大部分の生徒は、技能と体力が向上したと回答した。一方、生活態度は変わらないとの回答であった。

2人体制については、2つの視点からの指導を受けることができ技能が向上したとか、顧問の先生とは違った視点からのアドバイスがあり助かっていると肯定的に受け止めている一方で、特に1年生には2人の意見が違う時があり混乱したという2人体制に対して否定的な意見もみられた。

3）顧問へのインタビュー結果

顧問は、本学の学生について、教師という立場で生徒に接しており、安心して指導を任せることができ非常に助かった。ただ、指導方法についてさらに学び工夫してほしい点があったと述べた。また、本学の学生を受け入れて、部活動指導の面で非常に助かったこと、例えば、本学学生に1、2年生の指導を任せた結果、顧問自身は3年生に集中することができ充実した指導ができたと述べた。

部活動指導員の導入については、部活動指導の全てを任せることができるのであれば、教員の負担軽減になると思う。ただ、これまで外部から指導者を招いた部活動では様々なトラブルが生じており、かえって教員の負担が増えるケースをみてきたので、そのようなことが防げるかどうかと懸念材料も述べた。外部の指導者がトラブルなく行うためには、その「人となり」が大事で、大学生であれば、しっかりとコミュニケーション能力を身に付けさせることが必要であると述べた。

（7）成果と課題

部活動に大学生を派遣したことの成果として、以下の2点が挙げられる。部活動に大学生を派遣することは、第1に、顧問と異なる視点からの指導が可能で、生徒の技能向上および体力向上にある一定の効果を発揮したこと、第2に、大学生と顧問の業務分担を上手く行うことで、顧問の部活動指導にかかわる負担軽減になったことであった。一方問題点は、先に成果として挙げた顧問と異なる視点からの指導が、生徒の状況によっては、混乱を招く可能性があることが示された。ただし、生徒の中には、大学生と顧問のアドバイスが異なることを活かして、自分の技能向上に役立てている者もいた。

また、部活動に大学生を派遣するためには、大学生にコミュニケーション能力を身に付けさせることが大事であることが示された。

部活動に大学生を派遣する場合の課題として、第1に、技術指導に関して2人体制で生じることが想定される意見の食い違いを回避する手立てを検討しておくこと、第2に、大学生と顧問との部活動指導にかかわる業務分担を十分に検討しておくこと。第3に、コミュニケーション能力を身に付けた大学生を派遣する、あるいは派遣学生にコミュニケーション能力を身に付けさせることが挙げられる。

本プロジェクトの制度設計部門で立案した「部活動指導員の派遣事業案」のあり方を検討するため、学生派遣にあたり、以下を実施した。

1）派遣学生の指導教員は、派遣学生が部活動指導に適した資質能力を有するかどうかを吟味した。

- 児童生徒への深い愛情と使命感
- 高い規範意識
- コミュニケーション能力
- 指導する競技の専門的な知識・技能

2）派遣学生の指導教員は、派遣学生とともに部活動の指導方針、指導内容、指導方法、指導成果の検証方法を立案した。

3）事務室は、受入れ機関の学校長へ「インターンシップ依頼書および受入承諾書」を発送した。

4）派遣学生の指導教員は、受入れ機関の顧問に、学生派遣の目的、学生が立案した部活動の指導方針、指導内容、指導方法、指導成果の検証方法について説明し、承諾を得た。

5）事務室は、受け入れ機関の学校長から「インターンシップ受入承諾書」を受理した。

6）派遣学生の指導教員は、指導期間中、定期的に訪問指導した。

7）派遣学生の指導教員は、派遣期間の終了時に派遣先を訪問し、派遣学生の指導状況を観察した。また、派遣学生の指導について、成果と改善点などを顧問から聞き取った。

8）派遣学生の指導教員は、派遣先を訪問した結果を派遣学生と共有し、派遣学生の資質能力の向上に役立てた。

9）派遣学生は、「インターンシップ報告書」をまとめ事務室に提出した。